

獨逸に於ける日本研究の近況

文學士 石橋智信

獨逸人は、近來、非常に、日本に注意を拂ふ様になりましたが、まだ、日本の眞價は、到底、彼等に了解されないもので、私があちらに居ました時も、獨人の或るものは、日本に、石鹼や、電車があるかと尋ねました、私は驚いて、日本には、電車もあれば自動車もあるいや高架鐵道までも備つて居るのだと説明しました、實際、近時「日本」と云ふ名は名高くなりましたが然しその「日本」を解して居るものは幾人もありません、まして日本文明の眞内容を了解して居るものは幾人と數へるほどしかありません、然しながら、これは、獨逸人一般に就て述べたのでありますが、或る一部の獨逸人の間には、日本文明の研究を、根本的に完成しようと、努めてゐる人々があります、其の熱心は、實に驚くほどでありまして、殊に、

日本美術

の研究は、最盛に行はれてゐます、これは、困難な日本語をさまで研究せずとも、直ちに美術の大體は解るからであります、彼等は眞美大鑑や、國華等、其他舊い錦繪を通じて、日本美術を研究いたします

ので、これは、誰にでも、割合に入り易いのと、又一般の素人も、美術には趣味を有つてゐるからであります、獨逸人で、ヒルト Hilt といふ人は、東洋文明、殊に支那文明に明るい人で、現在、米國の或る大學に招聘されてゐる人であります、此の人も、亦、日本美術を、常に研究してをります、又、伯林にゐるコーン Kohn キュンメル Kümmel といふ二人は、熱心な日本美術の研究者でありまして、或る時、私がコーンの宅を訪れると、國華や、その他の日本美術の小冊子などを出して、これは誰の繪、これは誰の畫であると、コーン夫婦が、頻りに當て合ひをしてゐるのを見ました、傍で見てもすと、大抵三つに一つは正當に當ります、之を以て見ましても、彼等が、日本美術に對して、如何に造詣深いかは、推察されるのであります、又コーンとキュンメルとの二人で、東洋新誌 Orientalische Zeitschrift なるものを、發行いたします、これは、年に四回出しますので、その代價は、年に三十マルク以上です、これは、直接日本美術の研究書であるばかりでなく、弘く印度美術などの事も載せるのであります、印度美術を研究し、參照し、以て、日本美術の淵源を、根本的に見出そうとするのであります、次に ミュンスタルベルグ Minsterberg と云ふ人は、獨逸語で三冊になつた日本美術史を書いてをります、其の中には、日本の繪畫、彫刻は勿論、日本に於て用ゐらるゝネットケを詳しく研究してをります、此等の書物は、随分、費用の掛つた書物であります、何分、ミュンスタルベルグ のこの日本美術史は、最初の試みであるだけに、残念なことには、補正すべき多くの點があります、それ故に、コーン や キュンメル な

どは、此の書を全く價値のないものと云ひ、互に軋轢が絶えないのであります、此等の事實を考へて見ましても、日本人は、益、自國の美術を研究し、其の研究を外國語を以て發表せられむ事を望むのであります、其の他クルト Kunth なる人は、伯林の牧師でありまして、二十年間も、一人で、日本の錦繪等を集めて、研究した人でありますが、既に春信に就ての著書があり、又現在、歌麿に就て千頁位の書を書いてをるのであります、此等の人々は、日本に於ける美術の研究法と、大に其の趣を異にして居ります、次に、日本研究に關するもので、殊に

日本語學

の研究所としましては、東洋語學校なるものがあります、曾て、巖谷小波氏が居り、今は辻高衛氏が、講師として赴任されて居ります、この學校の擔任者は、ランゲ LANGE であります、以前フラウト Plant といふ人と二人で、やつてゐたのですが、フラウトの逝去後は、ランゲ一人でやつてをります、ランゲは、勅任教授として、日本研究者の白眉であつて、日本語の研究としては、可なり厚い文法の書を出しました、これも、中々よく出來た書物であります、次に、近頃まで、東京帝國大學の、獨逸語の講座を持つてゐました。フローレンツ Florenzも、亦日本研究を代表する人で、今から七年ほど以前に、ランゲの著書に對して、百以上の誤謬を指摘して争つた事があります、此等は、獨人が、如何に狹量で、又如何に、學究的態度に出づるかを、明かに示してゐるものであります、此の東洋語學校の外、伯林の陸

軍大學では、菅野文學士が、曾て日本語の講座を擔任してをりました、日露戦争當時は、學生も多かつたが、その後、學生が俄かに減じた爲、日本人及獨逸人を、各一人づゝにしました、この他には、

日本の歴史

研究が盛でありまして、伯林のオスカー、ナッホッド Oskar Naehod は、最熱心な研究者であります、彼自身が研究を始めましたのは、二十年以前でありまして、當時日本は、世界史上、今日ほどの、重大な地位を占めようとは考へられなかつたのであります、當時、彼は、ハムブルグにあつた日本の重要な史料を見て、突然、日本研究を志したと云つてをります、彼は個人で銀行を有する人で、中々の財産家でありましたが、學問から申しますと、寧ろ晩學に屬する人でありまして、三十年代に初めて大學を卒業したのであります、その卒業論文は、「日本と外國との關係」と云ふ題で、大部のものを書きました、彼は今から十七年前、帝國大學の史學會で、日本史に就て講演をしました、彼が、初め、日本研究に従事しました時、日本語を完全に研究するには、二十年位の年月を要するだろうと考へましたので、この困難を避ける爲に、又一方には、財産のある點からして、日本人の助手を置いて、日本の史料を翻譯せしめたり、又疑はしい點は、原文に就て調べさせて、日本歴史の研究を続けました、彼は、日本歴史の大化革新までを、一巻として、出版し、今第二巻を書いてをります、今から、二年も経てば、完成される事と思ひます、この二巻の書を著す爲に、彼は十年間、朝から晩まで、筆を執つたそうで、非常な努力を

費した産物であります、此の書は、全體に亘つて、索引書とも云ふべきもので、古事記、日本書紀、續日本紀等總じて六國史等を調べるのには、此の書を見れば、或る特殊研究問題についての其等史料の大凡の箇所がすぐ分る様になつてをります、これは、國史大系等の書に依て、總ての書物の頁數まで載せてあります、これらを見ましても、確かに、十年間の骨折りは、明かに表はれてゐます、又、此の他、ウルシュタイン *Ulstein* の「萬國史」の一部には、日本の部がありますが、夫れもナッホッドが、日本より新らしき材料を得て之に發表してをります、又、史學年報 *Preussischer Jahresbericht für die Geschichts-wissenschaft* 中の日本の部にも、歐米に於て發表された日本研究書を凡て紹介してをります、ナッホッドの紹介によれば毎年歐米で公にされる日本研究の書物は、六百乃至七百冊に及んでゐます、次に、ライプツェヒ大學には、文明史の研究院 *Institut für Kultur- und Universalgeschichte* なるものがありましてカール、ラムブレヒト *Karl Lamprecht* が居ります、この研究院は、大學内にはありませんが財政はザクセン王國の直轄に屬するもので、可なり大きなものであります、研究院の構造を申しますと先づ一階毎に小さい室が十個位づゝある、三階造りになつてをります、一番下が、獨逸歴史に關するもの其の上が、萬國歴史に關するものとなつてをりまして一ツ一ツの部屋が各の國の歴史の研究室になつて居ります、極東部の研究所もこれ等の一つであります、可なり廣い部屋二ツに書籍が一杯積まれてあります、其の書物の主なるものには、欽定古今圖書集成を初め國史大系、群書類從、史籍集覽、大日本史

料、古文書、大日本史等の書尙新しいものでは日本倫理彙編や、其の他、風俗書報迄も初めから揃へてあります。又大藏經も全部とつて藏せられてあります。又、伯林大學の教授であつた故グルーベ Grube (支那學者)の文庫もあります。ラムブレヒトは文明史を研究するに際しまして、一時代一國に限らず、全時代、全國民に亘つて研究し、尙、完全なる歴史研究には、「歴史以前の時代」まで研究するを要すると云ふ考へで、さてそうしましても「歴史以前の時代」を直接研究する事は出来なから之を補ふ研究として(一)現今の未開國の人民の状態(二)兒童の心理、研究迄も致して居ります。かくの如く全時代を通じて研究してをりますが亦全國民に通じて文明史を研究してをります。殊に日本の文明史などは特別な興味を以て研究して居ります。彼は、日本に就て研究した所を、大學で講義もし、又大學の歴史の演習におきましては、各國の歴史の研究に就て、それぞれ佛、米、英人等の助手を置いて居ますが日本人の助手をも、雇つてをります。元來、彼ラムブレヒトは、日本に就て、特に趣味を有してをります。一昨年ザクセン公の御前講義におきまして、獨逸の文明は、日本及支那文明と、その進歩の過程を同じくすることゝ公言しました。彼は、各國の文明を通じて、其の發達には、五つの階段があると云つてをります。日本文明も、この過程を踏んで進んで來たものであるし、矢張り、此の型に、當て嵌めやうとしてをります。又、彼は、歐洲各國の文明は、互に複雑な交渉影響の結果、全く獨立した文明を求めるとは、困難で、従つて、世界一般の文明を研究するには、更に、他の全く獨立した國の、文明を研究する

必要があると主張し、而も、丁度、歐洲文明に發達の程度の近い、日本及支那文明を研究して、之を西洋文明と對照し、かくして、世界の文明史に通ずる、一大原則のやうなものを建設しようとしてゐるので、（此のやり方が、果して正しいか否かは、別問題でありますが）、彼は、文明史の研究院で満足せずして、曾て、獨逸皇帝が、大學卒業生の爲に、その研究所を建て、此處では、主として、自然科学を研究せしめる事とし、既に研究制度を發表しましたが、彼ラムブレヒトも、亦、之と對抗して、精神科學の研究所の様なものを建てむとし、心理學等と聯關して、總合大學に次ぐ研究院を興さうとしました、茲に於て、少し滑稽じみた、興味あることは、彼ラムブレヒトが、ドレスデンに於ける演説の際、「吾人はプロイセンに對抗して、精神科學の研究所を建設せねばならぬ、之が爲には、政府と獨立して、一般人民の寄附を募り度い、但し、それは一ト口五萬マルク以下の寄附をうけぬ」と云つたといふ事です、今ラムブレヒトの、これまでの仕事を考ふるに、大學の講義及演習に於て、日本文明史を講ずると共に、日本の大寶令翻譯のを完成した事でもあります、これは研究院助手ウエーデマイエル Wedemeyer と、三浦新七氏との共譯であります、が、この譯が、更に多くの人に、理解されむ爲に、令義解令集解の譯文をも添へ尙ほ周禮唐六典等の研究によつて明かになつた、周に於ける支那法制の事をも附して公にするとの事です、この大寶令原文の譯と、並びに、此等の註釋を全部加へて、大版で二千頁以上にもなるであらうとの事です、要するに、獨逸人は、日本の文明、並びにその新しい力等に就て、根本的に、研究を進

めてをるのであります、吾々、日本人の希望としては、此の方面からして、大に、日本文明が、彼等外人に、紹介されむ事を望むのであります、此の日本研究に従事する外國人は、先づ日本語、並びに日本人特有の歴史、及び氣風に就て、研究せなければなりません、殊に、日本美術に於て、かの所謂、俳味なるものが、含まれてゐる點などは、時として、外人の、到底、氣の付かぬ事でありまして、東洋美術家としてのフエネロツサ自身も、日本美術の此の方面は、時として、外人研究者の、豫想外に出づるものが多いと、云つてをります、殊に、日本宗教の研究は、まだなかなか進歩せないのです、此の方面は、大に紹介されむ事を望むのであります、かのエーナ大學の教授ハース、Hans は阿彌陀佛の研究を發表し、フローレンツは神道の書を著はし、其他、シルレル Schiller 等も神道について書きましたが、今一步だと思ふ様な、物足りない點が多いのであります、それ故に、日本におきましても、此の點に注意しまして、爾來盛に歐文によつて、日本文明を、外人に紹介し、かのラムブレヒトが、大寶令を研究した努力に劣らない様に益努力して、以て、日本研究を完成し度いと、切に希望する次第であります。(完)

